

第 3 章

研究のまとめ

I 各部のまとめ

1 各部の取り組みのまとめ

今年度の各部における実践を以下にまとめる。詳しい内容については第2章の各学部の研究報告を参照されたい。

1-1 小学部の取り組みと成果

小学部研究テーマ及び目的（再掲）

○研究テーマ

個々の「よさ」に焦点を当てたキャリア教育の実践
～一人一人の子どもが「生き生き」と活動に取り組むことを目指して～

○研究の目的

児童一人一人の「よさ」を活かして、児童が主体的に活動に取り組むことをめざし、教育活動のさらなる改善をはかる。

小学部は、前研究の取り組みから、キャリア教育の視点として、児童一人一人の「よさ」に注目し、「よさ」を指導の手だてに活かすことを継続して行ってきた。今年度は、この「よさ」を活かし、将来像の大事な要素として考えられる主体性をより高められるよう、実践を行った。この実践を通して、主体性を高めるために、児童の「よさ」をどのように活かしたのかを考えると、①理解・見通し、②動機付け、③適切な課題設定という点において、共通項が見えてきた。また、児童の「よさ」を活かして集団の学習活動を設定した上で、個々に対して「よさ」を活かした手だてを考えることが大事であることも、それぞれの実践の取り組みから見えてきた。

具体的に、授業づくりの観点で、主体性を高める取り組みを見てみると、児童の興味関心か

ら、適切な課題設定をし、さらに理解しやすい、活動しやすい環境設定を考えて、学習活動を組み立てることが大事であることが分かる。つまり、児童にとって見通しや、活動方法など「わかる」環境設定と、意欲的に取り組める「やってみよう」という、興味関心を引き出した授業展開が、主体性を高める上で大切であると導き出されている。

このように、児童一人一人の「よさ」に注目し、適切な支援や授業展開を工夫することにより、児童の内面で「わかる」「やってみよう」という気持ちを高めることができた。さらに、児童にとって力を発揮しやすい環境づくりをすることで、児童の主体的な姿を引き出すこともできた。よって、教育活動の改善を行うことができた、ということが言える。

中学部研究テーマ及び目的（再掲）

○研究テーマ
生徒を主体的な姿に導くキャリア教育の実践 ～「行動の基となる能力」と「支援の方法と程度」の追求～
○研究の目的
計画、実行、評価、修正のサイクルに基づいて整理される「行動の基となる能力」と「支援の方法と程度」を教育実践に活かすことで、教育活動全般で生徒の主体性が発揮できるようにする。

中学部は、「行動の基となる能力」が発揮されたことを主体性の発揮であるとし、「自ら始める」「自ら関わる」「継続して行う」という行動を主体性の3つの観点として捉え、実践に取り組んだ。研究方法は、「行動の基となる能力」と「支援の方法と程度」の活かし方を明らかにした上で、実践の計画、実行、評価、修正のサイクルで取り組みを行うこととした。このように取り組むことで、「行動の基となる能力」と「支援方法と程度」を具体的なものにしていくことで、教育活動全般で生徒の主体性が発揮されると考えた。また、生徒の実態をより客観的に把握する手段として、生徒の実態や障害種なども考慮した上で、適切な発達検査を実施し、活用する取り組みも行っていった。

このサイクルで、実践に取り組んだ結果、以下の4点が成果として挙げられた。

- ① 発達検査の活用と有効性
- ② 計画・実行・評価・修正のサイクルの活用

と有効性

- ③ 「行動の基となる能力」の発揮と「支援の方法と程度」の関連性
- ④ 主体的な姿に導くための方策

中学部の取り組みでは、主体性を具体的な行動を見取ることで、生徒の主体性の高まりを教員間で共有化していった。その結果、PDCA サイクルの評価に客観性をもたせることができ、「修正」つまり、授業のさらなる改善策を多くの目で検討することができ、生徒の主体性の発揮につながる支援や手だての工夫を、授業の中で多く得ることができた。

以上のように、中学部の取り組みでは主体性という生徒の内面にある見えないものを、具体的かつ客観的に捉えることにより、教員間で共有を図り、主体性の高まりに注目し、PDCA サイクルを主体性の高まりに注目し、効果的に取り組むことができた。

高等部研究テーマ及び目的（再掲）

○研究テーマ 自分の意志・判断に基づいて行動する社会人をめざすキャリア教育の実践
○研究の目的 将来像の現実化にむけた教育活動において、自分の意志・判断に基づいて行動する力を育成するための指導の在り方を示す。

高等部は、中学部から引き継いだ将来像と、保護者が記入する「子どもの未来予想図」を基に、将来像の作成・見直しを行い、それを現実化していくことを目標として取り組みを行っている。この将来像を教員間や保護者と共有し、日々の実践で最大限自分の力を発揮できるように取り組んでいる。

将来像の現実化を目指して教育活動を行う中で、今年度学部として成果を出したい点を「自分の意志・判断に基づいて行動する力を育成するための指導の在り方を示す」ことに定め、年間を通して各教員の実践についての報告・検討を行ってきた。また、各教員が学部として共通の研究の方向性を保つため、「主体性」＝「自分の意志・判断に基づいて行動する様子」と学部で捉え、「自分の意志・判断に基づいて行動している場面」や「自分の意志・判断に基づいて行動する力を育成するための指導の在り方」についてアンケートを各教員間で行い、結果を整理しながら研究を進めてきた。

高等部では研究を進めるにあたり、主体性の高まりを見取る基準の一つとして、生徒への支援が少なくなることを考えて取り組んだ。また、支援の段階を測る指針として、「自発」→「言

葉かけ」→「指さし」→「手本」→「手添え」→「行動しない・できない」という、システムティック・インストラクションの考え方を基にした階層を参考にした。これらの検討や実践の結果、成果について以下2点が挙げられた。

1 点目の成果は、『主体性を高める指導の在り方を示したこと』である。実践報告や年間を通した検討結果を整理するなかで、『理解の促進』『動機づけ』『環境設定』という、授業を考えるうえで教員が留意すべき3つの要素が見出された。また、年間を通した実践から、3つの要素それぞれに関する、有効であった具体的な指導内容も導かれている（図2）。これら3つの要素及び具体的な指導内容を、授業において意図的に設定して取り組むことが、自分の意志・判断に基づいて行動する力を育成するための指導において大切である。

2 点目の成果は、「軸となる新たな視点を高等部の教員間で共有したこと」である。学部教員全体で「生徒の意志・判断を読み取る」「生徒の意志・判断を評価する」という、教育活動を展開する上での新たな軸となる共通の視点をもつことができたことが、成果の一つであると考えている。

健康教育部研究テーマ及び目的（再掲）

○研究テーマ	本校の児童生徒の健康に関する系統的な教育を探る ～小学部・中学部・高等部のそれぞれの取り組み～
○研究の目的	将来にむけた児童生徒の生活を支えるための健康教育を考える

児童生徒の健康に関する課題は、「将来、心身ともに健康で自分らしく生き生きと生活していくために、体調管理や生活習慣に関することを自ら実践できる力」をつけていくことである。児童生徒が将来にわたり主体的に生活するためには、心身ともに健康であることが大切であり、健康を維持するための生活習慣を身につけることが重要になってくる。そこで、健康教育部では、全学部をとおして健康教育の取り組みや内容を整理して、各学部の系統性や必要な手だてを探っていくこととした。

年間を通して、月に1回行われている発育測定時の保健指導は、具体的かつ視覚的に分かりやすく工夫して行っている。この実践も含め、各学部の取り組みを健康教育の視点で整理すると、

小学部：「自分のからだ・清潔」
中学部：「男の子・女の子のからだ」
高等部：「社会のマナー・かかわり」

とまとめられ、発達段階合わせた指導を行っているにとらえた。

健康教育を系統的により効果的に行うためには、全学部の児童生徒の成長を見すえている養護教諭と担任等が連携していく必要がある。今年度は、その一例として高等部で「からだの学習」に組み組みを行った。このことによって、生徒自身が自分の体に関心をもつことができ、中には将来にむけて夢や希望を考える生徒もあらわれ、良いきっかけとなった。

健康教育は、養護教諭と担任等で連携して、学校全体で取り組むことで、児童生徒の発達段階に合わせて行うことができ、健康を維持するための生活習慣を身につけていくためには重要なことである。また、個人差を考え保護者との連携もはずしてはならない。

今後の課題としてはこれらの連携をより強化し、学校全体で各学部とつながりをもって学習を積み重ねていくことである。

2 本研究の成果

今年度の各部の研究において、授業のさらなる改善にむけた取り組みが提示された。この取り組みの中で行われた、支援や手だての工夫、主体性を行動で見取った実践を挙げ、各部から上がった考察を、本研究の成果としてまとめる。具体的には「2-1 各学部の支援や手だての工夫から導いた、主体性を育成するために必要な要素」「2-2 主体性を高めるための各学部の系統性」「2-3 児童生徒の主体性を見取る取り組み」として以下述べていく。

2-1 各学部の支援や手だての工夫から導いた、主体性を育成するために必要な要素

前研究では一人一人の児童生徒に対する将来像を各学部で作成し、それを基に個々に応じた小・中・高12年間の教育を一貫性、系統性のあるものにしていく研究を行った。その中で将来像を作成するために、小学部は児童の「よさ」、中学部は「行動の基となる能力」と「支援の方法と程度」、高等部は「5つの観点」（場面、かかわり、実態、金銭収支、社会状況）と各学部の発達にあわせた観点を設定した。この研究結果を各学部が活かし、将来像から支援や手だての工夫がなされ、主体性を高めるための授業改善が行われた。（図1）

このように前研究を活かした、主体性を高めるための支援や手だての要素は、小学部は児童にとって分かりやすい教材や授業展開と、興味関心から意欲を引き出すこと、中学部は支援の方法と程度の活用、高等部は理解の促進、動機

付け（意欲）、環境設定である各学部まとめられた。この内容を読み取ると、高等部の研究のまとめで掲載された「自分の意志・判断に基づいて行動する力を育成するために必要な要素と指導内容（p68）」に当てはまり、各学部で行われた支援や手だての工夫は、「理解の促進」「動機付け（意欲）」「環境設定」に分けることができる。（図2）

児童生徒の主体性を高める教育活動のさらなる改善へむけての取り組みは、主体性を高める工夫の観点として「理解の促進」「動機付け（意欲）」「環境設定」の内容は共通すると考えられる。今後、本校におけるの主体性を高めるための工夫の観点を共有化することで、小・中・高同じ視点で実践を行えることが期待できる。

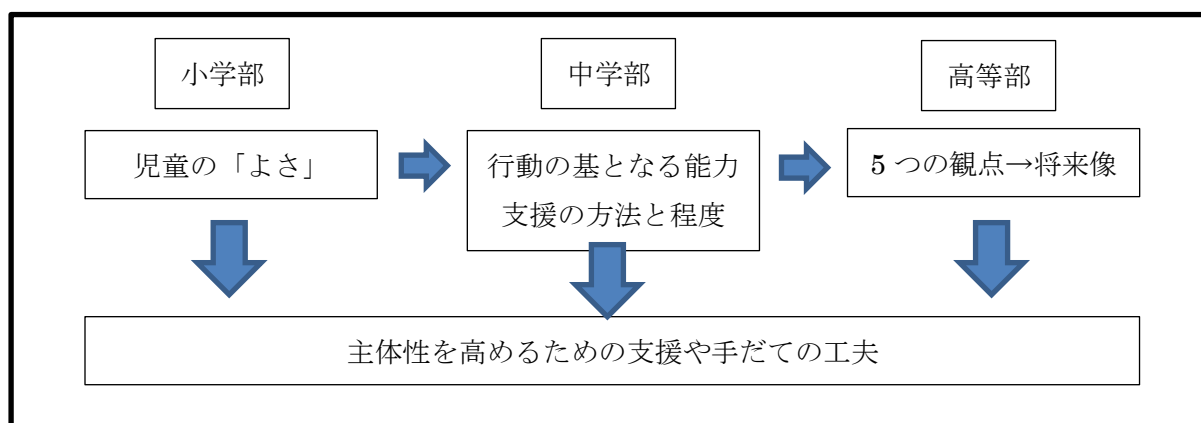


図1 各学部の主体性を高めるための支援や手だての工夫の考え方

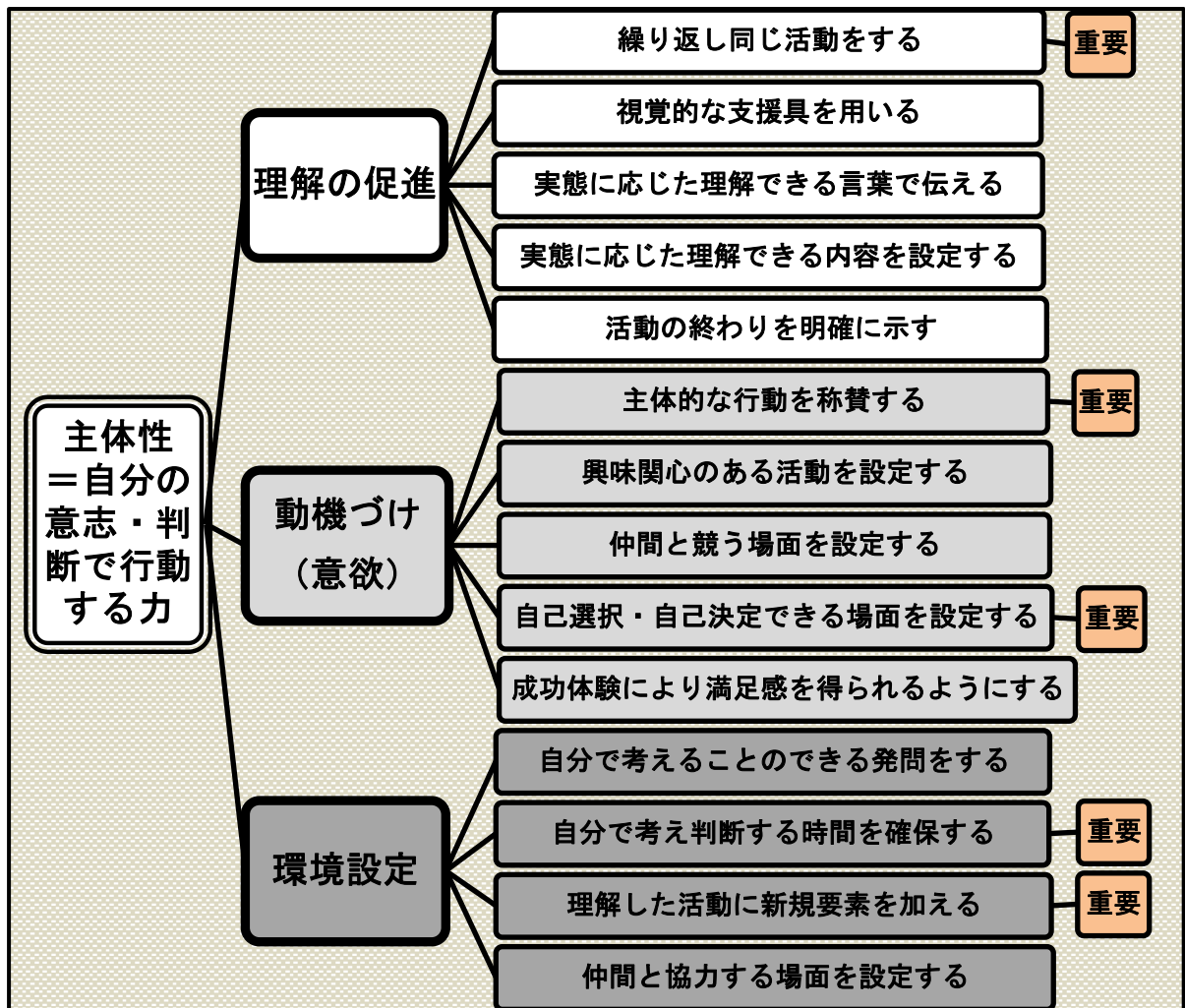


図2 自分の意志・判断に基づいて行動する力を育成するために必要な要素と指導内容 (再掲)

2-2 主体性を高めるための各学部の系統性

主体性を行動で見取る方法として、高等部では支援が少なくなることを主体性の高まりとする考え方が挙げられた。これは、すべての場合において該当する訳ではないが、支援の観点で他学部の取り組みを見てみると、小学部では支援の多い、少ないに関わらず、自分から率先して取り組める支援や手だての工夫に力を入れていた。中学部では個の力を客観的かつ適正

に見取るため、発達検査を行い、個に応じた支援や方法の程度を探る取り組みがなされた。

どの学部も共通して言えるのは、個々の力を最大限発揮しようとする点であり、発達段階に応じて実践に取り組んだ結果ではないかと考える。個々の発達段階に応じた取り組みが主体性を高めるための各学部の系統性を、下の図に表した。(図3)

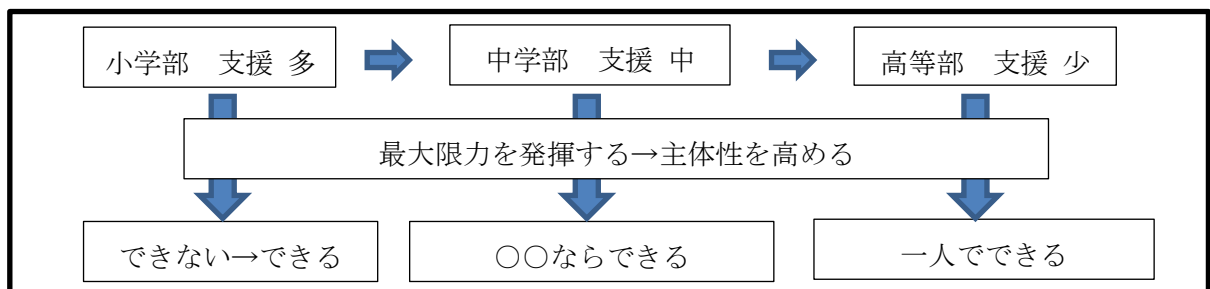


図3 主体性を高めるための各学部の系統性

2-3 児童生徒の主体性を見取る取り組み

主体性は「自分の意志・判断に基づいて行動する様子」であり、児童生徒の内面的な部分である。目に見えない内面的な部分を見取することは難しく、これまでは教員個々の主観によって見取ってきたことが多かった。主体性を客観的に見られるようにするために、各学部で児童生徒の行動から主体性を見取る試みが行われた。

小学部では「自分から」の行動の有無で見取り、中学部では「自ら始める」「自らかかわる」「継続する」行動で見取り、高等部では支援が少なくなってもできる行動の様子から見取る取り組みが行われた。(図4) この取り組みを

通して、児童生徒の行動をよく見て、児童生徒が十分に考える時間を保証した上で支援を行ったり、主体性を高める適切な支援であったかを、複数の目で見るとの検証が行われたりと、教員が共通の視点をもって、児童生徒の内面を評価することができてきた。

このような教員の姿勢の変化は支援の仕方にも現れている。高等部からは「すぐに支援しないで自分で行動することを待った」などの報告があり、児童生徒が最大限力を発揮できるように、教員集団が共通の考えで、支援が行えることにつながったと考えられる。(図5)

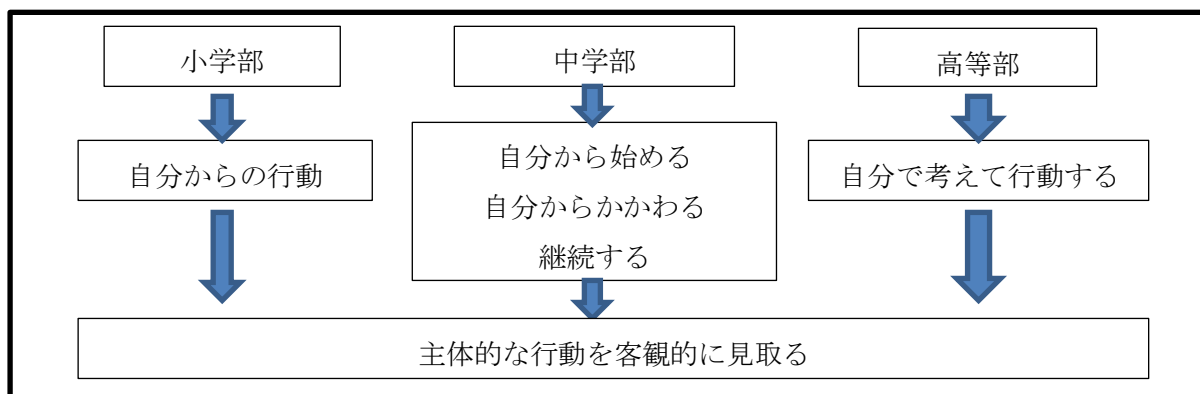


図4 各学部の児童生徒の行動から主体性を見取る取り組み

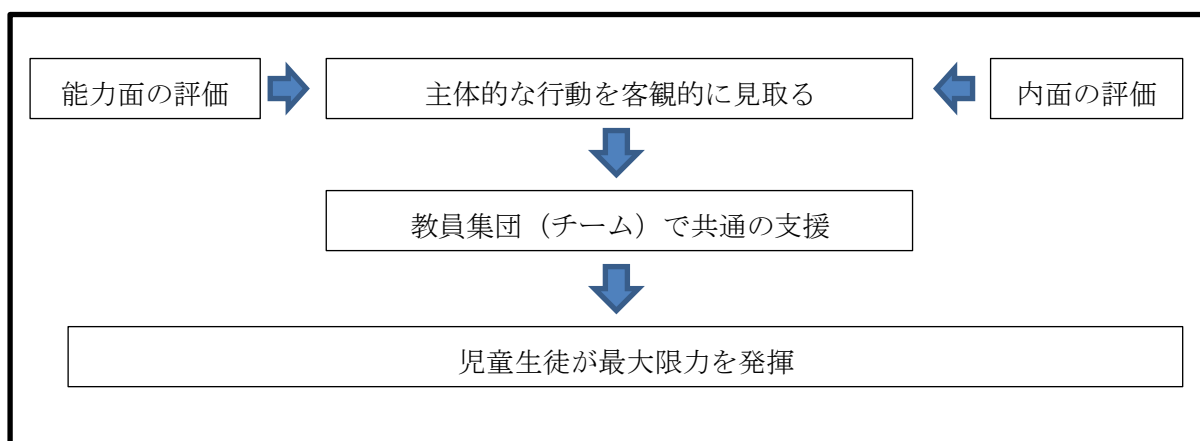


図5 教員集団 (チーム) での共通の支援への変化

3 今後の課題と方向性

本研究の目的は、前研究で検討された「将来像」を活用したキャリア教育のモデルを実践に活かし、児童生徒の将来の自己実現にむけて、最大限力を発揮できる教育活動のさらなる改善である。この研究をすすめるために、学部・学年間で考えを共有し、小・中・高の一貫性・系統性のある教育を実現していく。この目標達成にするための今後の課題と方向性を「3-1 主体性の高まりの評価方法」「3-2 学部・学年間での支援のつながり」「3-3 教育活動の見える化」として以下に述べていく。

3-1 主体性の高まりの評価方法

今回の研究の一つとして、どの学部も主体性の高まりの評価の難しさを挙げている。主体性の高まりの評価は、児童生徒の行動から見取るという点では一致しているが、方法には、それぞれの学部でばらつきがある。これは、各学部で発達段階で大切にしている視点の違いによるものと考えられる。また、児童生徒の主体性の表現の仕方はそれぞれ異なり、それを学校全体の評価方法に当てはめ、共通化することは難しい。今回の研究では、各学部での主体性を高める支援や手だての工夫の観点について、共通点を見出すことができた。これと同じように、主体性の評価についても各学部どのように評価するのか、実践の中から考え方や観点を導き、学部・教員間で共通しているところを探すことで、共有化できると考える。そうすることで、教員集団（チーム）として、児童生徒一人一人の学習場面での主体性の発揮を捉え、自己実現に向けた教育活動を行っていくことができるのではないかと考える。

3-2 学部・学年間での支援のつながり

各学部で検討されてきた主体性を高めるための支援や手だての工夫を、つながりをもって行うことができれば、児童生徒にとって主体性

を発揮しやすいのではないかと考える。これを実現するには、学年・学部をまたいだ教員間の連携が必要である。そのためには、より実用的な引き継ぎの方法や、個別の指導計画のより効果的な活用方法などを探っていく必要がある。そうすることで、児童生徒一人一人の支援や、その意図を共有することができ、より適切な支援が可能になると考える。

3-3 教育活動の見える化

本研究はキャリア教育の視点で児童生徒の自己実現に向けた、教育活動のさらなる改善をめざしている。この目標を達成するには、学部・全校の教員が一つのチームとなり、児童生徒一人一人に目を向け、日々PDCA サイクルで改善をしていくことが必要である。そのためには情報の見える化や共有化が重要であるが、これまでの研究の成果である「将来像を基にした学部間のつながり」「生き生きでのつながり」があり、他学部を知る機会として「授業研究会」も行ってきた。そして今年度は「主体性を共同で考えることにつながり」も得ることができた。来年度はまとめの年であり、これまで得られた研究成果を活かし、小・中・高一貫性・系統性のある教育活動がよりよく行われることを進めていく。

<引用文献>

- 1) 内閣府. 平成 23 年版 障害者白書. 2011
- 2) 福井信佳. わが国における障害者の離職率. 日本職業・災害医学会医誌第 58 巻. 2010. p266-269
- 3) 文部省・中央教育審議会. 今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について (答申). 1999
- 4) 文部科学省. 特別支援学校幼稚部教育要領、小学部・中学部学習指導要領、高等部学習指導要領. 2009
文部科学省. 特別支援学校教育要領解説総則等編 (幼稚部・小学部・中学部・高等部). 教育出版. 2009
- 5) 文部科学省. 小学校学習指導要領. 2008
文部科学省. 小学校学習指導要領解説総則編、総合的な学習の時間編、特別活動編. 東洋館出版社. 2008
文部科学省. 中学校学習指導要領. 2008
文部科学省. 中学校学習指導要領解説総則編、特別活動編. ぎょうせい. 2008
文部科学省. 中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編. 教育出版. 2008
- 6) 国立特別支援教育総合研究所. 知的障害者の確かな就労を実現するための指導内容・方法に関する研究. 2008
国立特別支援教育総合研究所. 知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究 - 「キャリア発達段階・内容表 (試案)」に基づく実践モデルの構築を目指して -. 2010
国立特別支援教育総合研究所. 特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブックーキャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善、個別の教育支援計画に基づく支援の充実のために. ジアース教育新社. 2011
- 7) 岩手県立総合教育センター 特別支援教育室. 特別支援学校 (知的) キャリア教育推進ガイドブック「理解編」. 2008
岩手県立総合教育センター 特別支援教育室. 特別支援学校 (知的) キャリア教育推進ガイドブック「実践・資料編」. 2008
岩手県立総合教育センター 特別支援教育室. 特別支援学校キャリア教育 啓発リーフレット (保護者用). 2008

- 8) 東京都教育委員会. 知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の推進 (平成 20 年度 障害のある児童・生徒の自立と社会参加を目指した指導の研究・開発事業 (キャリア教育推進委員会) 報告書) . 2009
- 9) 国立特別支援教育総合研究所. 障害のある子どもへの進路指導・職業教育の充実に関する研究アンケート調査報告書. 2009
国立特別支援教育総合研究所. 障害のある子どもへの進路指導・職業教育の充実に関する研究. 2010. p13-22
- 10) 愛媛大学教育学部附属特別支援学校. 卒業後の「働く生活」を実現するために—12 年間の教育内容の検討—. 2009. p53-58
- 11) 文部科学省. 「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引」—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—. 2006
- 12) 文部科学省・中央教育審議会 キャリア教育・職業教育特別部会. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申) . 2011
- 13) 国立教育政策研究所. 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (調査研究報告書) . 2002
- 14) 三村隆男. 図解 はじめる小学校キャリア教育. 実業之日本社. 2004. p9
- 15) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター. キャリア教育の更なる充実のために— 期待される教育委員会の役割—. 2011 . p4-5
- 16) Nevill&Super. The Values scale manual: Theory, Application, and research. Palo Alto, CA. 1986
- 17) Wehman, P & Kregel, J .Functional Curriculum for Elementary, Middle, and Secondary Age Students with Special Needs 2nd Ed. Pro-ed, TX. 2004

〈小学部〉

- 1) 上岡一世. キャリア教育を取り入れた特別支援教育の実践. 明治図書出版. 2013

〈中学部〉

- 1) 自閉症スペクトラムの移行アセスメントプロフィール T T A P の実際. 2010

〈高等部〉

- 1) 文部科学省. 特別支援学校幼稚部教育要領、高等部学習指導要領. 2009
- 2) 文部科学省. 高等学校キャリア教育の手引き. 2011
- 3) 小川浩. 重度障害者の就労支援のためのジョブコーチ入門. エンパワメント研究所. 2001.
p66-78
- 4) 外務省. 障害者の権利に関する条約. 2013

おわりに

副校長 長江 清和

私が本校で高等部の担任をした時の卒業生は、すでに30代の半ばとなっている。彼らが高等部の3年生の時に、年間通した単元で「卒業研究・卒業制作」を設定した。学校教育12年間の最後の1年を、一人一人が本当に好きなことに思う存分取り組ませたいと考えた。そしてあと1年で社会へ旅立つ彼らには、自分が本当に好きなことは何かと問われたら自信を持って答えられるものがあるのだろうか、そういうものが自覚できていないのであれば、自分が本当に好きなことを明確にすることが、卒業後の生き生きとした生活に結びつくであろうと考えたのであった。

電車好きの生徒は、路線図作りを行った。ディズニーキャラクターが好きな生徒は、木工の作品にステンシルでキャラクターをつけていった。料理に興味のある生徒は、一人で作った料理のレシピ本を作っていた。編み物が上手になりたい生徒は、大きなクッションカバーを編んでいた。自分の好きなことに取り組んでいる生徒は、授業時間を超えて自主的に活動していった。電車の模型を作りたいと取り組み始めた生徒は、兄貴的な存在の大好きな講師の先生と一緒に制作した。制作自体も楽しみであったが、その先生と一緒に制作する時間が楽しみになっていった。

とにかく、高等部3年生は忙しい。現場実習期間に入れば、「卒業研究・卒業制作」は、当然中断せざるを得ない。2週間の現場実習に取り組んでいた生徒の職場に、巡回で訪問したときのことである。頑張っている様子を確認し、休憩時間となった。担任が訪問していたことに気づいていて、休憩時間になったら担任の下に駆け寄ってきた。そして「教室のベランダのお花にお水をあげてください。」といった。「大丈夫だよ。毎日あげているから安心して。」と答えると、安心したようにニコリ笑って戻っていった。その生徒は、ガーデニングに興味があり、花の栽培に取り組んでいたのであった。好きなことがあれば、働く生活にも活力がわく、さらにいうならば、働き続けるためには、好きなことを持っていることが不可欠なのである。

本校のキャリア教育は、働く生活を中心にすえているが、日常生活を営む家庭での生活とともに、生活を豊かにする余暇の生活を含めて、「将来像」を設定している。小学部は3つの生活がまだ未分化の時期であり、興味関心に基づいた活動に生き生きと取り組む中で、自らの「よさ」を光らせることを大切にしている。中学部では、様々な体験的な活動に取り組む中で、生き生きとした生活を営ませている。具体的に自らの「よさ」を生活の中で活かせるようにすることを大切にしている。そして高等部では、明確に3つの生活を位置づけ、それぞれの質の向上をめざしている。そして、一人一人の「将来像」を現実化できるようにすることを大切にしている。

今年で2年間取り組んだ本研究は、本校が考えるキャリア教育の理念を、授業としてのアプローチを具現化する授業づくりの研究である。授業こそが基本であり、授業が何よりも大切であり、授業で勝負していく、そういう研究である。今年度もたくさんの実践的な指導者から御指導をいただいた。指導者の先生方に、深く感謝を申し上げたい。そして今年度は、校内でお互いに授業研究をする機会を多くもった。この中で多くのことを学び合うことができた。今年度、御指導をいただいた先生方、そして関係諸機関の皆様には、深く感謝申し上げます。来年度は、いよいよまとめの最終年度である。ぜひとも、皆様からの忌憚りの無い御指導御鞭撻をお願いしたい。今後さらに研究を深め、実践の現場に活かせる研究のまとめをしていく所存である。

研究同人

【 校 長 】 尾崎 啓子

【 副校長 】 長江 清和

【 教 諭 】

〈小学部〉

磯川あけみ
新井 清健○
大崎由香里○
西野 碧
関根 貴博
大迫 利衣
今井あゆり
三浦 駿介
大山 洋子
中西 孝
堀内 順子

〈中学部〉

柳澤 真美
村瀬太一郎○
江袋 明
大武 義己
加藤 智子
仙石 大吾
若林 上総
加藤 和子
濱田 悠希
木下 佑香

〈高等部〉

橋本 幹征
遠山 秀雄○
田上 智明
茂木 絢美
堀川まなみ
栗原 悦子
安藤 剛史
佐藤 容亮
田辺 彩
岩崎 有香
上野 香織
村瀬 拓

○：研究推進係

【 特別支援教育臨床研究センター「しいのみ」 】

若林 上総（中学部教諭）

国分 操（専門相談員）

大嶋 富恵（専門相談員）